

平成5年度下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

なか こし
中 越 遺 跡

長野県上伊那郡宮田村

1994

宮田村遺跡調査会

平成 5 年度下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

なか こし
中 越 遺 跡

長野県上伊那郡宮田村

1994

宮田村遺跡調査会

序

中越遺跡では昭和62年から、西原土地区画整理事業の進行にあわせて発掘調査を実施し、記録保存をはかってきたわけですが、今回、中越遺跡の区画整理第Ⅰ工区の外で、下水道工事が計画されたため、その部分について、記録保存のための発掘調査を実施しました。場所は、役場南の中越南線から北に入る道路の3箇所であります。

工事によって破壊される部分のみを調査する関係で、発掘は、形として細いトレンチを南北に3本入れただけであり、調査地点の状況を把握するには程遠いものではありましたが、縄文中期の集落の西端の様子を類推できる程度の資料は手にすることができました。

調査は、利用頻度の高い道路や、住宅地の中の狭い生活道路を通行止めにしなければ実施不可能ということで、当初は様々な困難が予想されました。しかし幸い、地元の方々を始めとする関係者の御理解と御協力により初期の目的を果たすことができました。それらの皆さんと、宮田村遺跡調査会会長友野良一先生をはじめとする現場での作業にあたられた方々に改めて感謝申し上げ、刊行の言葉とする次第であります。

平成6年3月15日

宮田村教育委員会

教育長 小林 守

例　　言

1. 本書は、平成5年度に実施した、下水道工事に伴う中越遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。
3. 年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。
4. 本調査にかかる記録や図面類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

目　　次

序	(1) 調査にいたるまで
例言	(2) 調査の組織
I　遺跡の概観と調査の経過……………1	(3) 調査の経過と遺構検出状況
1　遺跡の立地……………1	II　遺構と遺物……………4
2　調査の経過……………2	III　ま　と　め……………6

I 遺跡の概観と調査の経過

1 遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇側部に位置し、扇端である天竜川河岸から遺跡の中心部までは、約1kmを測る。この扇状地一面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明確にし始める地点である（図1）。

大沢川と小田切川の間に形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調

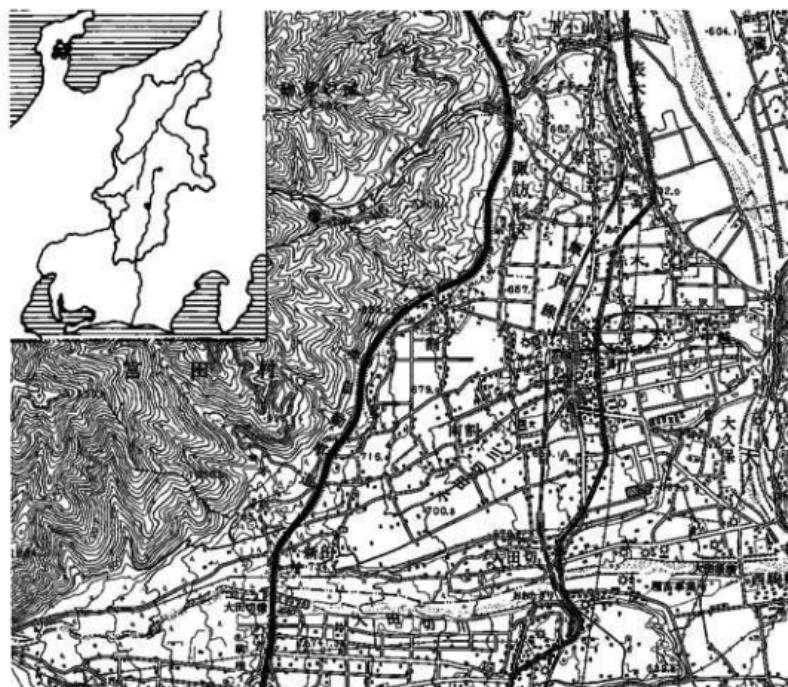


図1 位置図（5万分の1）

壺で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐殖土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定される。今回の調査地点は、北の高燥面のうちのやや低い南側の面で、遺跡の範囲からすると西の端に近い位置ということになる。北の高い面との比高差は、遺跡全体の中では最も大きい（図2）。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐殖土が厚い地点では、黒褐色土の上に黑色土が存在し、薄い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。薄い黄色土の下には、太田切扇状地を構成する拳大から人頭大、さらにはひとかえもある巨大な礫が混じる砂礫層が存在しているのだが、腐殖土の浅い地点では、それらの礫が表土下に顔を出している所もある。調査地点の腐殖土の全般的な様子については、調査地が道路部分であることもあって明らかにできなかった。

2 調査の経過

(I) 調査にいたるまで

中越遺跡では、昭和62年に着工した西原土地区画整理事業に伴う調査を継続して実施しており、下水道については、区画整理道路中に埋設する関係上、そのことにかかる調査は必要ななかったのだが、平成2年度から、工区外において下水道工事が進行し、それに伴う調査が実施さ



図2 調査地点図「宮田村平面図」一平成元年2月作成一をもとに作図)

れ始めた。平成5年度の調査は、平成5年7月15日、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会会长友野良一を受託者、宮田村教育委員会教育長林金茂を立会人として委託契約を結び、契約では、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の作成を業務内容とし、平成5年7月15日から平成6年3月15日までを委託期間としている。調査地点は、いずれも村道206号線（中越南線）から北へに入る道で、武道館の東（図2の①）と役場へ入る道（②）、その東の住宅の間へ入る細い道（③）の3本である。面積約160m²、距離にして約190mとなる。

（2）調査の組織

今回の遺跡調査にかかわる組織と、現場の発掘調査に参加され、整理を含めて実際の作業をして頂いた作業員の皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会	◇官田村教育委員会	◇調査参加者
会長 友野 良一	教育次長 小林 守	小田切守正
委員 片桐 貞治	(平成5年9月まで)	松下 末春
〃 平沢 和雄	小林 修	木下 道子
〃 青木 三男	(平成5年10月から)	酒井 鮎子
〃 伊東 酔一	係長 小林 修	林 美弥子
〃 唐木 哲郎	(平成5年9月まで)	西村アグ子
〃 加藤 勝美	係長心得 原 寿	伊藤 茂子
教育長 林 金茂	(平成5年10月から)	平沢きくみ
(平成5年9月まで)	係 小池 孝	
小林 守		
(平成5年10月から)		

（3）調査の経過と遺構検出状況

契約をとりかわした後ただちに現操作業に入り、まず武道館の東を調査した。武道館以前には宮田劇場があった所であり、アスファルトの下は相当荒らされていた。わずか残っていた破壊されていない部分の腐殖土層はかなり深かったものの、同層から遺物の出土はなく、武道館から北へ出る道も調査したが、東の水田開田の際に腐殖土部分は全て削られてしまっていた。

次に、役場へ入る道の東の細い道の調査に入った。両側が塀で囲んだ宅地で、下水道の軸を掘ってしまうと土の置場がなくなってしまうため、ミニバックのバケットの幅を掘るのが精一杯であった。調査区の北端で住居址を1軒検出し、中央北寄りに縄文時代中期の包含層を発見した。

最後に役場へ入っていく道を調査した。道路開設時に削られていたものの、部分的に残っていた包含層からの遺物の出土はごくわずかで、遺跡の西端といった様相を見せていた。現場での調査は7月28日に終了した。整理作業に入ったのは12月過ぎだが、今年度は主として区画整理事業

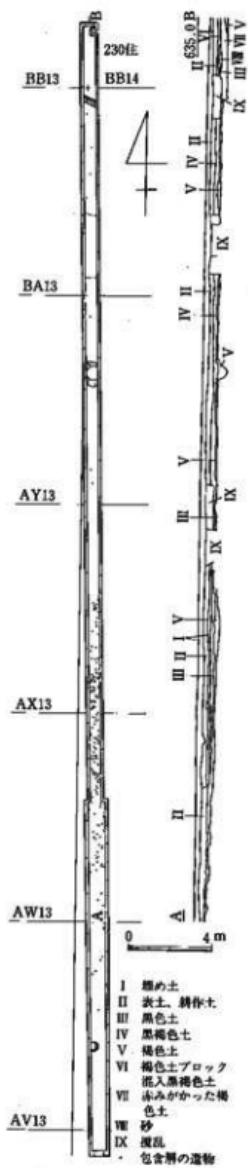


図3 ③地点遺構全体図

に伴う調査が長期にわたって続いたため、充分な資料を提示できなかった面がある。

本報告の調査地点を遺跡地に設定されているグリッドで表わすと、AV～BB-02(図2の①)、AV08～BC10(②)、AU～BB-13・14(③)ということになる。

II 遺構と遺物

(1) 230号住居址

BB-13・14グリッドに検出された。調査区の北端に南北壁がかかっているだけであり、平面形については軸線が南北線と斜交すること以外はわからない(図3)。さほど堅くない床面は粘土質黄色土ブロックがわずかに混じる褐色土によって貼ってある。壁下に周溝がある。1基発見されたピットは深さ20cm程度で、柱穴である可能性もある。

遺物は少ないが、土器は単純で、縄文中期後葉I期だけがあり(図4)、遺構の所属時期も同一としていいだろう。

(2) 土坑、ピット

AY14グリッドに中型のピット、AV14グリッドに小型のピットが検出された。いずれも人工の遺構である可能性がある。

(3) 包含層

調査区内のAWからAXにかけて、遺物が集中して出土する地点があった(図3)。土層をみると、この地点だけ黒褐色土の上に薄いものではあるが黒色土がレンズ状に堆積しており、遺物は黒色土から褐色土の範囲から出土した。包含層は、台地と同じ方向に走る広い溝状の部分に堆積した土に遺物が入り込むことによって形成されたものとみた。ただ、その成因までは知ることはできなかった。

遺物は縄文中期初頭から後葉にわたる。溝の北壁下といった位置から正位の状態で、底部を欠く、平出III Aの祖形である中期初頭の深鉢が出土した。

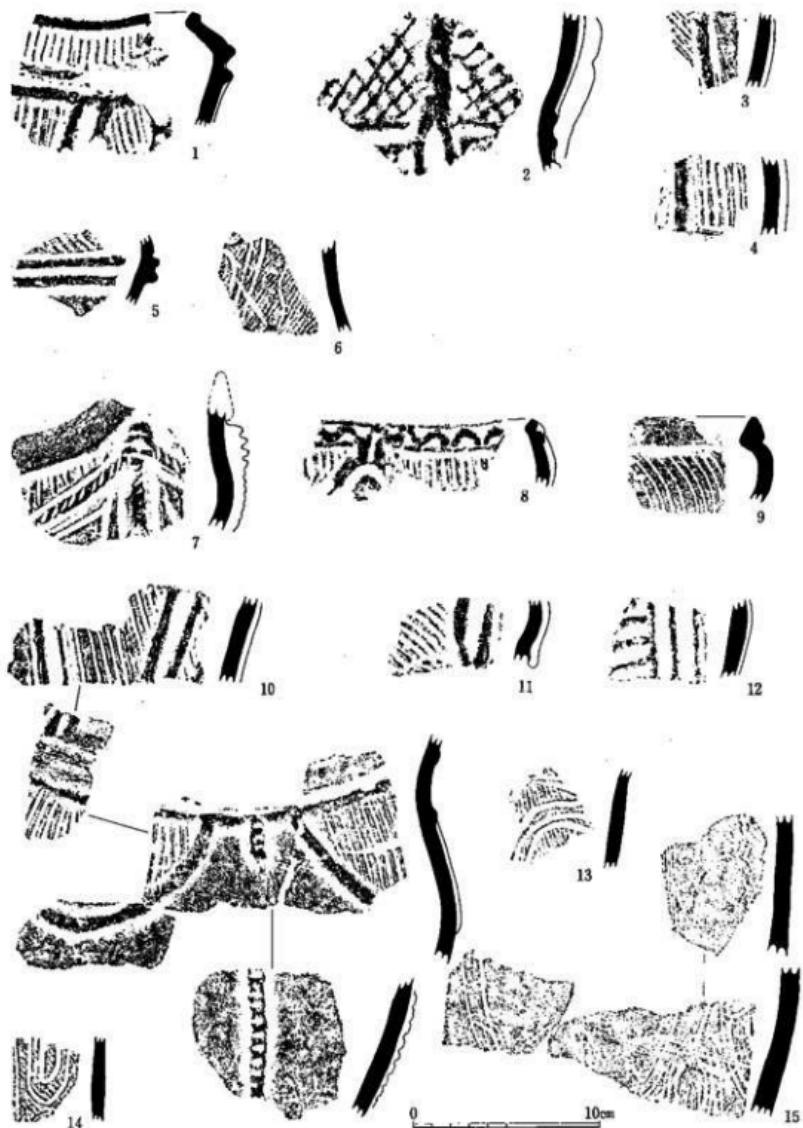


图4 230号住居址(1~6)、包含层(7~15)出土土器拓影

III まとめ

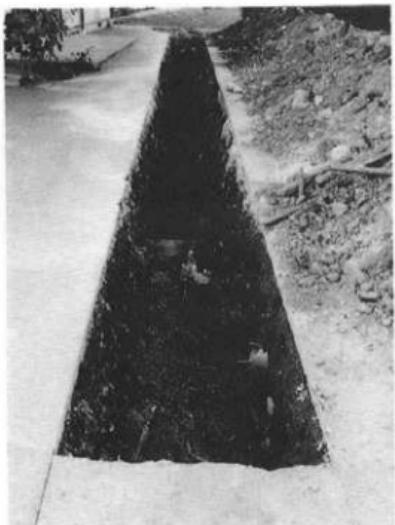
今回の調査は、広大な中越遺跡のうち、縄文中期の集落の範囲の中では西端であろうと考えてきた地点で実施した。狭いトレンチを入れ、わずかなサンプルを採集したに過ぎないが、表面採集などで推定してきた遺跡の範囲についての具体的な資料を得ることができ、一定の成果をあげた。

台地上南半のやや低い面の北端である調査地点の地形をもう少し詳しくみると、旧中学校建設時に大分整地はされているのだろうが、北の縄文前期の集落が展開しているところの、役場が南縁に位置する一段高い面は、南西方向に面積を広げ、しかも南のやや低い面との比高差は最も大きい。一方、南に存在していた縄文後期の遺跡の立地する低位面は高くなり、比高差を減じてきており、結果として、縄文中期の遺跡の範囲としてきた調査地点は、台地の南縁に面しているとは言いたい。東方一帯が地形的に遺跡立地の適地としての条件を備えているとしたら、それが大きく変化し始める地点なのである。

調査によって、縄文中期後葉Ⅰ期の住居址が1軒と、土坑、ピット各1、それに遺構の範疇からは外れるかもしれないが、縄文中期の包含層1箇所が発見された。いずれも調査範囲の中では東端であり、調査地点は縄文中期の集落の北西の縁といった位置に相当するとしていいだろう。

宮田村で下水道工事に伴う調査を実施したのは今回が2回目であった。この一連の調査で、幅1mに満たないトレンチの発掘でも、遺跡についての情報は一定程度手にすることが可能であることがはっきりした。さらに現道の下でも、最近の工法によるところ以外は遺跡は意外と残っていることもいえ、今後の調査対象として課題を残した。

写 真 図 版



①地点調査状況



②地点調査状況



③地点調査状況（左：南より、右：北より）





230号住居址



包含層出土器出土狀況



包含層出土土器

平成5年度下水道工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

中越遺跡

平成6年3月15日 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印刷 ほおづき書籍舗
長野市柳原2133-5

